スラヴ語の行為名詞 -nie, -tie について[1]

序　言

§1　第2回印欧語研究者専門会議での発表に際して、筆者はスラヴ語の -ние, -тие に終る「行為名詞」に言及し、通説に従ってこの種の名詞は「意義的に動詞的色彩が極めて強く、自動詞からも他動詞からも自由に派生する事を得たところから、古代スラヴ語において格変化を行わない不定法にかわって広汎な使用をみた」と述べた[2]。

しかしこの種の名詞が接尾辞 *-no-, *-to- を有し、かつ行為を状態として観ずる被動形動詞過去から派生するものであるとするならば、これが「行為性」をもつということ自体、一つの矛盾であるとせねばならないであろう。

これと関連して、動詞と名詞の意義の相違を、認識における範疇的な相違に帰すべきであるとする著者の仮説から、動詞的意義の名詞的意義への転化をどのように説明するかという問題も、生じて来る。

これらの諸問題の解決のためには、この種の名詞の初原的な意義を明らかにしなくてはならない。その手はじめとして、この種の名詞とギリシア語原典の不定法との関係を考察しようというのが、この小論の趣旨である。

資料はグラゴール文字文献の古層にあると信じられている、ゾグラフ四福音書である。これは少くとも11世紀中葉以前に成立したと考えられている。後代の挿入とされる第41葉から第57葉までは、資料としては用いていない。

本　論

I. -nie, -tie に終る名詞と不定法

1. ギリシア語不定法との対応

§2　ギリシア語の不定法に対応する例は従来しばしば引用され、この種の名詞の意義の持つ動詞的性格を読者に印象づけているが、実際には極めて少数であって、269例のうち僅々10例を数えるにすぎない。

自動詞から派生したものは、

1) **по въскрѣсновенн же моемь, варѣѭ вы въ галилеи** (p. 40, 66r15)

μετὰ δὲ τὸ ἐγερθῆναί με προάξω ὑμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν, (Matth. 26:32)

---

[1]『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第3巻第2号　昭和57(1982)年3月30日　50–59頁。

[2]拙稿「スラヴ語における非人称受動表現」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』2(2), 1981, p. 108.

「しかしわたしは、よみがえってから、あなたがたより先にガリラヤへ行くであろう。」[3]

2) І ВНДѢВЪ ꙗ СТРАЖДАЖШТꙗ ВЪ ГРЕБЕННІ· БѢ БО ВѢТРЪ ПРОТИВЬНЪ ІМЪ· (p. 57, 94r2)
καὶ ἰδὼν αὐτοὺς βασανιζομένους ἐν τῷ ἐλαύνειν, ἦν γὰρ ὁ ἄνεμος ἐναντίος αὐτοῖς. (Marc 6:48)
「ところが逆風が吹いていたために、弟子たちがこぎ悩んでいるのをごらんになって」

3) І МНОГОМЪ СЛѢПОМЪ ДАРОВА ПРОЗЬРѢНЬЕ· (p. 94 155r15)
καὶ τυφλοῖς πολλοῖς ἐχαρίσατο βλέπειν. (Luc. 7:21)
「(イエスは) また多くの盲人を見えるようにしておられたが、」

§3　他動詞から派生したものとしては、

4) НЕПОДОБИТЕ Сѧ ОУБО ІМЪ· ВѢСТЪ БО ОЦЬ ВАШЬ ІХЪЖЕ ТРѢБОУЕТЕ ПРѢЖДЕ ПРОШЕНИѢ ВАШЕГО· (p. 5, 9v3)
μὴ οὖν ὁμοιωθῆτε αὐτοῖς, οἶδεν γὰρ ὁ πατὴρ ὑμῶν ὧν χρείαν ἔχετε πρὸ τοῦ ὑμᾶς αἰτῆσαι αὐτόν. (Matth. 6:8)
「だから、彼らのまねをするな。あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。」

5) ВЪЗЛИѢВЪШИѢ БО СИ МИРО НА ТѢЛО МОЕ НА ПОГРЕБЕНИЕ Мѧ СЪТВОРИ· (p. 39, 64v15)
βαλοῦσα γὰρ αὕτη τὸ μύρον τοῦτο ἐπὶ τοῦ σώματός μου πρὸς τὸ ἐνταφιάσαι με ἐποίησεν. (Matth. 26:12)
「この女がわたしのからだにこの香油を注いだのは、わたしの葬りの用意をするためである。」

6) ОУБОІТЕ Сѧ ІМѦШТАѢГО ВЛАСТЬ ПО ОУБЬЕНІИ ВЬВРѢШТИ ВЪ ѢЕОНѦ· (p. 108, 178v7)
φοβήθητε τὸν μετὰ τὸ ἀποκτεῖναι ἔχοντα ἐξουσίαν ἐμβαλεῖν εἰς τὴν γέενναν. (Luc.

[3] 元の論文は、古教会スラヴ語の部分はラテン文字で翻字してあり、また邦訳もつけていないが、ここではスラヴ語はキリル文字で、表記し、邦訳をつけた。ゾグラフ四福音書の底本は、*Editiones monumentorum slavicorum veteris dialecti, Quattuor evangeliorum Codex glagoliticus olim Zographensis nunc Petropolitanus,* characteribus cyrillicus transcriptum notis criticis prolegomenis appendicibus aucutum adiuvante summi Ministerii Borussici liberalitate edidit V. Jagić, Graz, 1954. である。なお使用したキリル文字は神戸市外国語大学助教授岡本崇男氏の作成にかかるものである。記して謝意を表したい。

12:4)
「殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかたを恐れなさい。」

§4　この種の名詞が、能動・被動両様の相の意義をもって現われる例として、よく引用されるのは、次のものである。

7) **вѣсте ѣко по дъвою дьноу пасха бывается· і҆ сн҃ъ ѹск҃ы прѣдаетъ сѧ на распѧтие·** (p. 38, 64r10)
Οἴδατε ὅτι μετὰ δύο ἡμέρας τὸ πάσχα γίνεται, καὶ ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου παραδίδοται εἰς τὸ σταυρωθῆναι. (Matth. 26:2)
「あなたがたが知っているとおり、ふつかの後には過越の祭りになるが、人の子は十字架につけられるために引き渡される。」

8) **і҆ ведошѧ и на распѧтие·** (p. 43, 72r23)
καὶ ἀπήγαγον αὐτὸν εἰς τὸ σταυρῶσαι. (Matth. 27:31)
「(総督の兵士たちは) それから十字架につけるために引き出した。」

スラヴ語の相の区別は、この場合明らかに文脈に依存している。

§5　被動相不定法に対応するものには、この外次のような例がある。

9) **по прѣданиі же іоаннověѣ приде н҃с въ галилеѩ проповѣдаѩ еваѣлие цр҃сиѣ бж҃иѣ;** (p. 48, 78r9)
Μετὰ τὸ παραδοθῆναι τὸν Ἰωάννην ἦλθεν ὁ Ἰησοῦς εἰς τὴν Γαλιλαίαν κηρύσσων τὸ εὐαγγέλιον τοῦ θεοῦ. (Marc. 1:14)
「ヨハネが捕えられた後、イエスはガリラヤに行き、神の福音を宣べ伝えた。」

10) **они же прилежаа҆хѫ гласы велиі· просѧште его на пропѧтье·** (p. 132, 218v22)
οἱ δὲ ἐπέκειντο φωναῖς μεγάλαις αἰτούμενοι αὐτὸν σταυρωθῆναι. (Luc. 23:23)
「彼らは大声をあげて詰め寄り、イエスを十字架につけるように要求した。」

もし筆者の見落しがないとすれば、資料中に存在するこの種の例は、以上で尽されている。

ここから生じるのは、それではギリシア語の不定法は、スラヴ語の何によって訳出されていたか、という問題である。

II. ギリシア語不定法の対応

1. 目的をあらわすもの

§6　スラヴ語の不定法に対応するものは、皆無とはいわないまでも、全体からすれば意外に少数である。これらのスラヴ語の不定法は、目的をあらわす τοῦ ＋ inf. にしばしば対応しているから、スピヌムの代用であるとみて、差支えないであろう。たとえば、

11) **прѣдъїдєшн бо прѣдъ лицємь гнємь· оуготовати пѫть єго· дати разоумъ спєньѣ людємъ єго въ ѡставлєньє въ ѡтъпоуштєньє грѣхъ нашихъ·** (p. 83, 136r14)
προπορεύσῃ γὰρ ἐνώπιον κυρίου ἑτοιμάσαι ὁδοὺς αὐτοῦ, τοῦ δοῦναι γνῶσιν σωτηρίας τῷ λαῷ αὐτοῦ ἐν ἀφέσει ἁμαρτιῶν αὐτῶν, (Luc. 1:76–77)
「主のみまえに先立って行き、その道を備え、罪のゆるしによる救をその民に知らせるのであるから」

12) **клѧтвѫ еѭже клѧтъ сѧ къ аврамоу оцю нашемоу дати намъ бестрахъ· ізбрѧкы врагъ нашихъ ізбавльшемъ сѧ·** (p. 83, 136r4)
ὅρκον ὃν ὤμοσεν πρὸς Ἀβραὰμ τὸν πατέρα ἡμῶν, τοῦ δοῦναι ἡμῖν ἀφόβως ἐκ χειρὸς ἐχθρῶν ῥυσθέντας. (Luc. 1:73–74)
「父祖アブラハムにお立てになった誓いをおぼえて、わたしたちを敵の手から救い出し...」

このように目的をあらわし、スピヌムと異ならない不定法の使用は、スラヴ語のもつ統辞論的制約に起因すると考えられる。すなわち、スラヴ語においてスピヌムの使用されるのは、verba movendi に伴われる場合に限られているのである。この為爾余の動詞と共に用いられるのは、専ら不定法になる。

§7　しかし否定の μή を伴うものは、да 等に導かれる副文章によって訳出される傾向がある。たとえば、

13) **невъзможьно єстъ да не придѫтъ съблазни...** (p. 118, 194v22)
Ἀνένδεκτόν ἐστιν τοῦ τὰ σκάνδαλα μὴ ἐλθεῖν. (Luc. 17:1)
「罪の誘惑が来ることは避けられない。」

14) **оуи же єю дръжаашєтє сѧ· да єго нє познаашєтє·** (p. 134, 222v15)
οἱ δὲ ὀφθαλμοὶ αὐτῶν ἐκρατοῦντο τοῦ μὴ ἐπιγνῶναι αὐτόν. (Luc. 24:16)
「しかし(二人の弟子は)彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった。」

§8　同じく目的をあらわすものに、πρός + inf. の構文がある。これは例 5) のように -nie, -tie に終る名詞によっても訳出されるが、その他にも ѣко + inf. あるいは ѩко да に導かれる回説的表現が、みとめられる。

15) і҆ въ врѥмѧ жѧтвѣ рекѫ дѣлѧтелѣмъ· съберѣте пръвѣе· плѣвелъ· і҆ съвѧжѧте ѩ҆ въ снопы ѣко жєштн ѩ҆· (p. 19, 31v19)
Καὶ ἐν καιρῷ τοῦ θερισμοῦ ἐρῶ τοῖς θερισταῖς, Συλλέξατε πρῶτον τὰ ζιζάνια καὶ δήσατε αὐτὰ εἰς δέσμας πρὸς τὸ καταχαύσαι αὐτα... (Matth. 13:30)
「収穫の時になったら、刈る者に、まず毒麦を集めて束にして焼き、麦の方は集めて倉に入れてくれ、と言いつけよう。」

16) вънємл҃ѣте млостынѭ вашѧ· не творнтн прѣдъ ѵк҃(ы) да виднмн бѫдєте і҆мн· (p. 5, 8v11)
Προσέχετε (δέ) τὴν δικαιοσύνην ὑμῶν μὴ ποιεῖν ἔμπροσθεν τῶν ἀνθρώπων πρὸς τὸ θεαθῆναι αὐτοῖς. (Matth. 6:1)
「自分の義を、見られるために人の前で行わないように、注意しなさい。」

§9　目的をあらわすギリシア語の不定法が、スピヌムによって訳出されることもある。すでに述べたように、この場合スピヌムと共に用いられるのは、原則として verba movendi である。

17) і҆ бысть єгда съконьча н҃с· ѕаповѣдаѩ обѣма на десѧте оучєннкома своі҆ма· прѣідѣте отъ тѫдѣ оучнтъ · і҆ проповѣдатъ въ градѣхъ і҆хъ· (p. 13, 22v21–22)
καὶ ἐγένετο ὅτε ἐτέλεσεν ὁ Ἰησοῦς διατάσσων τοῖς δώδεκα μαθηταῖς αὐτοῦ, μετέβη ἐκεῖθεν τοῦ διδάσκειν καὶ κηρύσσειν ἐν ταῖς πόλεσιν αὐτῶν. (Matth. 11:1)
「イエスは十二弟子にこのように命じ終えてから、町々で教えまた宣べ伝えるために、そこを立ち去られた。」

18) і҆дѫштамъ же і҆мъ коупнтъ· прнде женнхъ· (p. 37, 60v23)
ἀπερχομένων δὲ αὐτῶν ἀγοράσαι ἦλθεν ὁ νυμφίος. (Matth. 25:10)
「彼らが買いに出ているうちに、花婿が着いた。」

§10　この外 τοῦ + inf. がスラヴ語の回説的表現に対応する場合がある。

19) къто оубо єстъ вѣръны рабъ· і҆ мѫдры, єгоже поставнтъ г҃ь надъ домомь своі҆мь· да дастъ і҆мъ въ врѣмѧ пнштѫ і҆хъ· (p. 36, 59v22–23)

Τίς ἄρα ἐστὶν ὁ πιστὸς δοῦλος καὶ φρόνιμος ὃν κατέστησεν ὁ κύριος ἐπὶ τῆς οἰκετείας αὐτοῦ <u>τοῦ δοῦναι</u> αὐτοῖς τὴν τροφὴν ἐν καιρῷ; (Matth. 24:45)
「主人がその家の僕たちの上に立てて、時に応じて食物をそなえさせる忠実な思慮深い僕は、いったい、だれであろう。」

20) **І ПОМАНѦША ПРНУѦСТЬНИКОМЪ· ІЖЕ БѢАХѦ ВЪ ДРОУЗѢМЬ КОРАБЛѢ· ДА ПРНШЬДЬШЕ <u>ПОМОГѦТЪ ІМЪ</u>·** (p. 89, 145v21)
Καὶ κατένευσαν τοῖς μετόχοις ἐν τῷ ἑτέρῳ πλοίῳ <u>τοῦ</u> ἐλθόντας <u>συλλαβέσται</u> αὐτοῖς. (Luc. 5:7)
「そこで、もう一そうの舟にいた仲間に、加勢に来るよう合図をした。」

ДА に導かれる副文章は、形式的にはギリシア語の ἵνα + conj. と同等である。このような回説的表現は、原文の不定法が種々の修飾語を伴う場合に多くみとめられるが、一方不定法あるいはスピヌムによって訳出されている場合にも、種々の修飾語を伴うものが少くない。従って修飾語の存在は、訳出に際して行為名詞を用いるか否かを決定する規準となったとしても、回説的表現を選ぶか不定法あるいはスピヌムを選ぶかという規準には、ならなかったと考えられる。

2. 時間的先後関係をあらわすもの

§11　これに属するものには、πρό, μετά, πρίν + inf. の構文がある。

μετά + inf. は例 1)、6)、9) にみられるように、すべてスラヴ語の行為名詞によって訳出されている。

πρό + inf. も例 4) のように行為名詞によって訳出される場合がある。

この外ギリシア語の不定法には対応しないが、時間的先後関係をあらわす文脈において、行為名詞がしばしば用いられていることから、この種の文脈においては、ギリシア語の不定法の意義が、相対的に行為名詞に近づいていた (逆は真ではない) と推定される。これはこれらの不定法が何れもアオリスト形であることによっても裏づけられる。

この例外をなすのは πρίν + inf. である。これは常に **ПРѢЖДЕ ДАЖЕ** に導かれる副文章によって訳出されているが、その理由は明らかではない。ただスラヴ語でこれが常に虚辞的な **НЕ** を伴っていることから、訳者が πρίν + inf. の不定法によって示される行為を、話者にとってその実現が好ましくないものと理解していたのかもしれない。

21) **РЕЧЕ ЕМОУ <u>НС</u>· АМИНЬ <u>ГЛѢ</u> ТЕБѢ· ѢКО ВЪ СНЬ НОШТЬ <u>ПРѢЖДЕ· ДАЖЕ КОУРЪ НЕ</u> ВЪЗГЛАСНТЪ· ТРИ КРАТЫ ОТЪВРЪЖЕШИ СѦ МЕНЕ·** (p. 40, 66r23)
ἔφη αὐτῷ ὁ Ἰησοῦς, Ἀμὴν λέγω σοι ὅτι ἐν ταύτῃ τῇ νυκτὶ <u>πρὶν</u> ἀλέκτορα <u>φωνῆσαι</u> τρὶς ἀπαρνήσῃ με. (Matth. 26:34)

「イエスは言われた、「よくあなたに言っておく。今夜、鶏が鳴く前に、あなたは三度私を知らないというだろう。」

3. 同時的行為をあらわすもの

§12　ギリシア語原典には ἐν + inf. によって同時的行為をあらわす構文が、比較的多数みとめられる。これは例 2) を除き、すべて回説的に訳されている。

この構文の圧倒的多数は、**ЕГДА** に導かれる副文章に対応している。

22) **ЕГДА ИА ИЬ ГЛАХЖ АР'ХИЕРЕІ І СТАРЦИ· ИИУЬСОЖЕ ОТЪВѢШТАВААШЕ·** (p. 42, 70v17)
καὶ ἐν τῷ κατηγορεῖσθαι αὐτὸν ὑπὸ τῶν ἀρχιερέων καὶ πρεσβυτέρων οὐδὲν ἀπεκρίνατο. (Matth. 27:12)
「しかし、祭司長、長老たちが訴えている間、イエスはひと言もお答えにならなかった。」

23) **БЫСТЪ ЖЕ ЕГДА БЫСТЕ ТОУ· ІСПЛЪНИША СѦ ДЬНЬЕ РОДИТИ ЕІ·** (p. 83, 136v22)
Ἐγένετο δὲ ἐν τῷ εἶναι αὐτοὺς ἐκεῖ, ἐπλήσθησαν αἱ ἡμέραι τοῦ τεκνεῖν αὐτήν... (Luc. 2:6)
「ところが、彼らがあそこ(ベツレヘム)に滞在している間に、彼女(マリア)は月が満ちて...」

§13　この構文に現在不定法の使用されるのが多いことは、同時的行為という意義からして当然であるが、アオリスト不定法の使用も排除されている訳ではない。

24) **ЕГДА ЖЕ ГЛАГОШЕ· МОЛѢАШЕ І ФАРИСѢІ ЕТЕРЪ·** (p. 107, 176r17)
'Εν δὲ τῷ λαλῆσαι ἐρωτᾷ αὐτὸν Φαρισαῖος... (Luc. 11:37)
「イエスが語っておられた時、あるパリサイ人が...申し出たので...」

25) **І БЫСТЪ ЕГДА СѦ ВЪЗВРАТИ ПРІІМЪ ЦРСЬЕ...** (p. 122, 202r13–14)
Καὶ ἐγένετο ἐν τῷ ἐπανελθεῖν αὐτὸν λαβόντα τὴν βασιλείαν... (Luc. 19:15)
「さて、彼が王位を受けて帰ってきたとき...」

§14　ἐν + inf. はまたしばしば dativus absolutus によって訳出されることもあった。これもこの構文の有する同時性の意義からよく説明できる。

26) ВЪВРАШТАѢШТЕМЪ СѦ ІМЪ· ѠСТА ѲТРОКЪ НС· ВЪ ІЛМѢ·... (p. 85, 139v17)

ἐν τῷ ὑποστρέφειν αὐτοὺς ὑπέμεινεν Ἰησοῦς ὁ παῖς ἐν Ἰεροσαλήμ... (Luc. 2:43)
「(さて祭りが終って)彼が帰るとき、少年イエスはエルサレムに居残っておられたが...」

27) ѲУБѲѢШѦ ЖЕ СѦ· ВЪШЬДЪШЕМЪ ЖЕ ІМЪ ВЪ ѲБЛАКЪ... (p. 101, 166v6)
ἐφοβήθησαν δὲ ἐν τῷ εἰσελθεῖν αὐτοὺς εἰς τὴν νεφέλην... (Luc. 9:34)
「(彼らが)その雲に囲まれたとき、彼らは恐れた...」

4. 原因をあらわすもの

§15　不定法と結ぶ前置詞には、この外原因をあらわす διά がある。この構文はすべて回説的に訳出されているが、用いられているのは大部分が接続詞 ЗАНЕ、一部が小詞 БѲ である。

28) Ѫ ДРОУГОЕ ПАДЕ НА КАМЕМЕ· І ПРОЗѦБЪ ѲУСЪШЕ· ЗА ÑЕ НЕ ІМѢѪШЕ ВЛАГЫ· (p. 96, 158v5)
καὶ ἕτερον κατέπεσεν ἐπὶ τὴν πέτραν, καὶ φυὲν ἐξηράνθη διὰ τὸ μὴ ἔχειν ἰκμάδα. (Luc. 8:6)
「ほかの種は岩の上に落ち、はえはしたが水気がないので枯れてしまった。」

29) БѢ БѲ ЖЕЛѢѦ ѮТЪ МНѲГА ВРѢМЕНЕ ВИДѢТІ И· ЗА ÑЕ СЛЫШАДАШЕ МНѲГА Ѯ ÑЕМЬ· (p. 131, 217v14–15)
ἦν γάρ ἐξ ἱκανῶν χρόνων θέλων ἰδεῖν αὐτὸν διὰ τὸ ἀκούειν περὶ αὐτοῦ ... (Luc. 23:8)
「(ヘロデはイエスのことを)聞いていたので、会ってみたいと長いあいだ思っていた。」

30) НАВѲДЬЮ ЖЕ БЫВЪШЮ· ПРИПАДЕ РѢКА ХРАМИНѢ ТОІ· І НЕ МѲЖЕ ПОДВИГНѦТИ ЕѦ· ѮСНѲВАНА БѲ БѢ НА КАМЕНЕ· (p. 93, 153r21–22)
πλημμύρης δὲ γενομένης προσέρηξεν ὁ ποταμὸς τῇ οἰκίᾳ ἐκείνῃ, καί οὐκ ἴσχυσεν σαλεῦσαι αὐτὴν διὰ τὸ καλῶς οἰκοδομῆσθαι αὐτὴν (τεθεμελίωτο γὰρ ἐπὶ τὴν πέτραν.) (Luc. 6:48)
「洪水が出て激流がその家に押し寄せてきても、それを揺り動かすことはできない。岩の上によく建ててあるからである。」

5. 結果をあらわすもの

§16　ギリシア語では結果の意義をあらわすのに、ὥστε + inf. の構文を用いることがあ

るが、これも -nie、-tie に終る名詞によって訳出される事はない。ѣко + inf. の構文あるいは ѣко によって導かれる副文章を用いるのが通例である。

31) і̑ събѣрашѧ сѧ къ ѥмоу народи мнозѣ· і̑ ѣко вълѣзъ въ корабь сѣде...(p. 17, 29v2–3)
καὶ συνήχθησαν πρὸς αὐτὸν ὄχλοι πολλοί, ὥστε αὐτόν εἰς πλοῖον ἐμβάντα καθῆσθαι...(Matth. 13:2)
「ところが、大ぜいの群衆がみもとに集まったので、イエスは舟に乗ってすわられ...」

32) тогда привѣсѧ емоу вѣсъноуѭшть сѧ слѣпъ і̑ нѣмъ· ицѣлѧ і· ѣко слѣпъ і̑ глоухъ і̑ глаше і̑ глѧдаше· (p. 15, 26v16–18)
Τότε προσηνέχθη αὐτῷ δαιμονιζόμενος τυφλὸς καὶ κωφός· καὶ ἐθεράπευσεν αὐτον, ὥστε τὸν κωφὸν λαλεῖν καὶ βλέπειν. (Matth. 12:22)
「そのとき、人々が悪霊につかれた盲人のおしを連れてきたので、イエスは彼をいやして、物を言い、また目が見えるようにされた。」

33) і̑ творитъ вѣтви велью· ѣко мошти подъ сѣнью его· птицамъ небскымъ витати· (p. 53, 86v2)
καὶ ποιεῖ κλάδους μεγάλους, ὥστε δύνασθαι ὑπὸ τὴν σκιὰν αὐτοῦ τὰ πετεινὰ τοῦ οὐρανοῦ κατασκηνοῦν. (Marc. 4:32)
「(一粒のからし種がまかれると)大きな枝を張り、その陰に空の鳥が宿るほどになる。」

結　論

§17　以上述べてきたところから、-nie、-tie に終る名詞が一般に不定法を代替しうるものではなかったこと、この種の名詞が不定法と競合する領域は極めて限られていること、が明らかになったと思われる。

このように 1) ギリシア語の不定法の意義の範囲が極めて広汎であるにもかかわらず、スラヴ語の -nie、-tie に終る行為名詞に対応するのが稀であるという事実、2) ギリシア語の不定法が、スラヴ語の不定法、スピヌムおよび回説的表現によって訳出されていること、などから、スラヴ語の不定法とこの種の行為名詞とは、截然と区別されており、しかも行為名詞の動詞的性格が、予想されたよりもはるかに低いと結論される。

しかし両者の意義を単なる思弁によって区別し、あるいは同定することは、危険であろう。必らずそこに研究者の母語の干渉があると、予測されるからである。従来この種の名詞を「変化する不定法」と考えて来たという、まさにそのことが、何よりも雄弁にこの間

の事情を物語っている[4]。両者の相違を明らかにするためには、何よりもまず、その使用の相における綿密な分析と方法的な取扱いを必要とするであろう。

両者の相違がどのようなものであるかについては、考えのない訳ではないが、与えられた紙幅はすでに尽きた。稿を改めるより外はない。

---

[4] A. Vaillant, *Grammaire comparée des langues slaves,* t. III, Le verbe, Paris 1966, p. 122; F. Miklosich, *Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen,* Bd. IV, Syntax, Heidelberg, 1926, p. 877 etc.